Tulips University of Tsukuba Repository

縄文時代の動物骨を用いた儀礼

著者	牧 武尊
雑誌名	筑波大学先史学・考古学研究
号	25
ページ	23-36
発行年	2014-03
その他のタイトル	Rituals of Using Animal Bones in the Jomon Period
URL	http://hdl.handle.net/2241/00149866

筑波大学　先史学・考古学研究　第25号　23-36　2014

研究ノート

縄文時代の動物骨を用いた儀礼

牧　武尊

縄文時代の遺構で動物骨を特殊に扱った例を比較検討し，動物骨を用いた儀礼の目的について検討した。出土状況から遺構を埋葬・焼骨・埋納に分類した。埋葬は人の墓域で出土するものと動物単体で出土するものがある。焼骨は住居に伴って出土するもの，動物骨のみ出土するもの，人骨に伴って出土するものがある。埋納は配列を伴うもの，動物骨と遺物が集積するもの，住居において頭骨が出土するものがある。

動物の埋葬は動物種において様相が異なる。イヌの埋葬は個人の埋葬と共に出土するケースがあり，それらは特定の個人とイヌとの関係の近さの結果であると考えられる。イノシシの埋葬は人の墓域から出土しているケースが多いことから個人というよりもある人間集団の葬送儀礼の一環として行われた可能性がある。動物の焼骨の一部は住居に関連して出土しており，住居の廃棄に関係した儀礼に用いられていた可能性があり，焼けた動物骨のみの遺構は動物種の特徴から生業に関わる儀礼の結果であると考えられる。人骨と共に焼かれた動物骨は人間の再葬の一環として焼かれた可能性がある。動物骨の埋納については，生業に関する儀礼，複合祭祀場，住居に関する頭骨の儀礼などに用いられたことが想定された。

これらの儀礼行為の目的を検証していくためには，動物骨を特殊に扱った遺構例の検討数を増やすとともに，儀礼に関する民族誌の集積や民族考古学の成果を利用して，具体的かつ体系的に縄文時代の儀礼を復元していく必要がある。

Ⅰ．はじめに

縄文時代の遺跡には動物骨を特異に扱った遺構が出土しており，その中には儀礼を行った結果ではないかと考えられているものがある。本稿ではそうした遺構をまとめて比較，検討することによって動物骨を用いた儀礼の形式や意味，目的を考察するものである[1)]。以下に述べる先行研究では意味や目的の解釈が限定的であり，それらについての再検討とその他の意味や目的を持ったものはないのかを検討する。以下に述べる遺跡について，遺構の出土状況は参考文献に挙げたそれぞれの報告書に準拠している。

1.　先行研究

本テーマについてこれまで体系的な研究はほとんど行われておらず，いくつかの観点に限定して考察している研究が多い。高山純は縄文時代の配石遺構に伴って焼けた人骨や獣骨が多く出土することに注目し，その特徴をまとめている（高山 1976-1977）。高山は動物骨は人の埋葬に伴うものであるとして配石遺構を墓であると仮定した。またその目的について骨を焼く行為とアイヌの物送り信仰との類似を見出し，死者のための財産としてあの世に送るためであるとした。大竹憲治は道平遺跡の報告書において遺跡から出土する埋設土器のうち，人為的に獣

骨の一部を入れているものを対象に動物祭祀について考察を行った（大竹 1983）。貝塚が儀礼的な役割を持ち漁撈文化に属するものであるのに対して，動物祭祀を狩猟採集文化に位置づけて対比構造を示した。また遺構の出土状況でタイプ分けも行っている[2)]。新津健は焼骨について時期を縄文時代晩期に限定して遺構を網羅的にまとめている（新津 1985）。出土状況から6つのタイプに分類し，獣骨の種類や部位の偏りに関しても言及している[3)]。近年では遺構を埋葬・焼骨・埋納のカテゴリーに分けその目的について出土状況に応じた解釈を行っている（新津 2011）。西本豊弘は動物に関する儀礼について，動物骨が儀礼的な意味を持ち得る条件として①頭骨の存在，②一定の配列，③焼く・穿孔等の加工，④土壇上や土坑内など施設を伴うこと，以上4点を示した（西本 2008）。そして条件が複数そろったときに儀礼的扱いと認めるとして取掛西遺跡，東釧路遺跡，下太田貝塚，井戸川遺跡，金生遺跡の5つを挙げた。

以上が主たる先行研究であるが，儀礼の条件や出土状況における分類がそれぞれ提示されている。しかしながら儀礼の目的として主に挙げられるのは狩猟儀礼と葬送儀礼である。前者は豊漁を願うものと獲物が属する領域の神に対する感謝の意を示すものとがあり，漁撈についてもこれに含まれる。後者は人の死に伴って動物供儀をするというもので，死者のあの世での生活を意識して動物を捧げる。この両見解は背景にアイヌの物送り信仰があり，縄文時代の精神世界に言及するうえでこの信仰は一般的に参考にされている。

2. 遺構の分類

動物骨が特徴的に出土した遺構は新津が示したように埋葬・焼骨・埋納に分類できる。埋葬は動物骨がほぼ完形で出土した遺構もしくは完全な状態で埋葬されたであろう遺構である。焼骨は動物骨が焼かれた状態で出土したものであり，埋納は動物骨が完形で出土せず，また焼けてはいないが，人為的な配置や配列を伴ったものと分類しておく。

Ⅱ. 検討遺跡

1. 埋葬遺構

動物が埋葬された状態で出土した遺跡のうち，いくつかの例をここで取り上げたい。（第1表）。イヌが埋葬されたと考えられている遺構例は数多く，近年の研究では内山幸子が遺構数を244挙げている（内山 2014）。本稿ではその中からいくつかを扱う。

千葉県香取市白井大宮台貝塚は縄文時代中期の遺跡であり，7Tトレンチ内にある二つの土坑SK-01・SK-02が特徴的である。深さ80cmのSK-01の底面からは埋葬された「きゃしゃな」男性人骨と埋葬されたイヌが同じ側臥位で出土している。また男性人骨の脚部の上に貝層が堆積しており，打割されたイノシシとシカの頭骨・四肢骨・脊椎骨が含まれている。そして貝層の上部には幼いイノシシの頭骨・脚骨が出土している。底面に出土した人骨とイヌの骨は欠損や外傷がないことから同時期に埋葬されたものと考えられる。SK-02は調査が完全になされていない遺構であるが5-6歳の幼児が側臥位で埋葬されており，その付近でイノシシの骨が解剖

第1表　埋葬遺構が出土した遺跡例

	遺跡	時代	出土した動物	人骨に関連	出土状況
1	千葉県香取市 白井大宮台貝塚	中期初	犬	○	合葬
2	千葉県千葉市 有吉北貝塚	中期初	犬		
		中期後半	猿		
3	千葉県茂原市 下太田貝塚	中期～後期	猪・犬	○	墓域
4	宮城県気仙沼市 田柄貝塚	後期～晩期	猪	○	墓域
		後期後葉	犬・猪	○	
5	千葉県市原市 西広貝塚	後期後～晩期	猪・犬・狸	○	墓域
6	茨城県つくば市 小山台貝塚	後期～晩期初	犬	○	墓域
7	宮城県気仙沼市 前浜貝塚	晩期中葉	犬	○	合葬
8	愛知県田原市 伊川津遺跡	晩期中葉～後葉	犬	○	墓域

学的に正しい位置を保って散乱している。埋葬された幼児は頭に脛骨が入り込むという特異な状態で出土した。イノシシは埋葬されたと考えられるが，骨が一部欠落しており埋葬後に何か手が加えられた可能性がある。

千葉県千葉市有吉北貝塚は幼いサルの全身骨格が土坑から出土している。骨の状態から一度解体してから埋めたものであろうとされている。骨の分析で11月から4月にかけて死亡したと推測され，土坑には他の骨等がないことから埋葬のための土坑であると考えられる。また幼いイヌの全身の骨が散乱した状態で狭い範囲（幅25cm以内）から出土した場所がある。サルの埋葬のように解体して埋置したものであるかなどの詳細は判断できない。

千葉県茂原市下太田貝塚では，縄文時代中期と後期の墓域が検出されている。動物の埋葬は10例出土した。詳細が分かっている7体のうち5体がイノシシ，2体がイヌの埋葬である。イノシシは4例が幼獣であり，生後1-2週間の個体もある。イヌも1例は生後5か月程度の幼い個体である。縄文時代中期の墓域では複数の幼児を近接して埋葬した区域が認められ，その付近から生後2-3か月のイノシシ（93号獣）と生後5か月のイヌ（94号獣），少し離れて生後1-2週間のイノシシ（92号獣）と生後4-5か月のイノシシ（116号獣）が出土している。つまり人の幼児を埋葬した区域に幼獣が埋葬されているのである。また人に囲まれるように埋葬された首のないイノシシ（2号獣）は人の埋葬と同様の屈葬に近い状態で埋葬されている。1号獣は埋葬された人骨の下肢を破壊する位置で出土している。これらは人の埋葬と動物の埋葬の深いかかわりや，一部では人と同様に動物が埋葬された可能性を示している。報告書において動物遺存体を分析した西本豊弘，姉崎智子，太田敦子は家畜化された動物と人の死後の扱いに何らかの共通性があり，動物の埋葬が家畜化の可能性を示すものだとした（総南文化センター編 2003）。

宮城県気仙沼市田柄貝塚では人の墓域と動物の埋葬場所が重なって検出されている。成人が7体，新生児もしくは胎児が12体，動物はイヌが22体でイノシシが2体発掘されている。このうち縄文時代後期後葉では，新生児および胎児が4体（Nos.6, 7, 10, 11），イヌが幼獣7体（第9号-15号犬骨），幼いイノシシ1体（第2号猪骨）が出土している。田柄貝塚も下太田貝塚

と同様に人の埋葬と動物の埋葬の関連が考えられる。しかし年齢を特別に意識して形成されたものではない。動物の埋葬遺構には土坑や遺物を伴うものも存在し，遺構ごとの扱いの差がみられる。

千葉県市原市西広貝塚では墓域と想定される場所から，動物が埋葬された状態で出土している。イヌが6地点で7個体，幼いイノシシが1個体，タヌキが1個体である。動物埋葬の6例が埋納例のある57号住居付近から出土していることがひとつの特徴である。イヌのうち1体は骨折の治癒痕があり，2体は人骨の埋葬された場所を切るように埋められている。イノシシは腕に穿孔がみられ，埋葬された土坑は魚の骨や他の獣骨も検出した。動物骨に加工を施し，埋葬された動物以外の骨も出土していることから本貝塚の埋葬例の中では多少異質である。タヌキは53号住居の近くで出土し，骨には骨増殖の跡がみられることから何らかの病気を患っていた可能性がある。

茨城県つくば市小山台貝塚は縄文時代後期から晩期の遺跡である。イヌの埋葬遺構が認められ，土坑に単独埋葬されたものが2体と，ひとつの土坑から生後1-2か月の幼獣1体と若い個体2体の計3体が出土している。単独埋葬されたイヌはいずれも前半身が検出され，後半身の残りは悪く，歯の咬耗がみられた。他の3体は深さ30cmの土坑から出土している。本貝塚では人の埋葬も認められ，中期中葉で4体，後期末葉で31体，時期不明が4体の計38体の人骨が出土している。

宮城県気仙沼市前浜貝塚は縄文時代晩期中葉の遺跡であり，長さ1.06m幅0.6mの土坑から，仰臥屈葬された女性人骨に近接してイヌが出土している。女性には抜歯が認められ，15-16歳と推定され，鎖骨と椎骨の一部に朱が付着していた。イヌは雄の成獣であり，多少破損がみられ肩甲骨が欠損している。また土坑に近接して土器棺墓があり，胎齢10か月ほどと推測された胎児の骨が検出された。胎児は女性と関連していた可能性が高い。また女性の骨に朱が認められることから，埋葬された後に覆土を除いて朱を施した可能性があり，その際にイヌの骨が一部欠損したと考えられる。

愛知県田原市伊川津貝塚は晩期中葉から後葉の遺跡であり，人の墓群とイヌの埋葬8例が同じ層から出土している。新津健が本貝塚について「人の墓の周囲を囲むかのように4頭の犬が埋葬されている」と表現しているように（新津 2011），人とイヌの埋葬が近接してみられる。SZ201及びSZ202を示していると考えられるが，囲むように埋葬しているかは筆者には判然としない。

2. 焼骨遺構

本稿で取り上げる動物骨が焼かれた状態で出土した遺跡例を第2表に示した。長野県千曲市円光房遺跡では住居から5例，土坑および集石遺構から出土した例がそれぞれ1例ずつある。2号住居，4号住居，13号住居は縄文時代中期末の敷石住居であり，17号住居は後期初めの敷石住居，26号住居は晩期前葉の住居である。2号住居の炉からイノシシの頭蓋骨片と四肢片が

第2表　焼骨遺構が出土した遺跡例

	遺跡	時代	動物	人骨に関連	出土場所
1	長野県千曲市 円光房遺跡	前期	猪・鹿・狸・兎	○	住居
2	岩手県北上市 八天遺跡	中期～後期	猪	○	土坑
3	長野県伊那市 百駄刈遺跡	後期	不明		炉・住居
4	山梨県北杜市 金生遺跡	後期～晩期	猪・鹿		土坑
5	山梨県都留市 中谷遺跡	後期～晩期	鹿・猪		住居・配石
6	福島県大熊町 道平遺跡	後期～晩期	猪・鹿		土器中
7	群馬県桐生市 千網谷戸遺跡	晩期	猪・鹿・熊・猿・雉		住居
8	新潟県糸魚川市 寺地遺跡	晩期	猪・鹿・狐・熊・猿	○	炉状配石

出土しており，頭蓋骨片のひとつはヒビが入るほど強く焼かれている。またシカの頭蓋骨と四肢片も少量出土している。4号住居には大量の焼骨がみられ，その多くが炉から出土した。炉からイノシシとシカの骨片が合計1kg出土し，床から400g出土した。イノシシは幼獣を含む計4体が確認され，頭骨片の割合が高い。シカは頭片や角，四肢片があった。この住居は敷石や炉石すべてに強い被熱痕がみられた。ヒビの入った骨が出土していることから，4号住居は火災にあった住居で，風などの影響で強く焼けてしまったとされている（戸倉町教育委員会編1990）。13号住居は4号住居と同様に敷石が焼けており，イノシシとシカの骨片が同層から出土した。17号住居は焼けた人骨も住居入口から少量出土しており，同じ場所でイノシシの成獣の下顎骨片も出土している。この住居は大型で異形動物土偶も出土しており，居住以外の目的で使用された可能性がある。26号住居はイノシシとシカの他に炉内からタヌキとウサギの骨が出土した。焼け方が弱く，タヌキは顎の骨が完形で発見された。住居から計700gの骨片が出土し，うち床面から半焼けのシカ骨が100g出土した。炉石には被熱跡や欠損があり，また赤色顔料が付着している平石と台石や，ミニチュア土器が出土し，粘土塊が散乱していることから，この住居が土器工房であった可能性がある。1号土坑は縄文時代前期のものであり，焼かれた獣骨の細片，灰と少量の焼土で満たされている。イノシシの破損した頭片14個体，シカの骨片2-3個体，キジの骨片が出土し，焼土の状態から別の場所で焼かれて土坑に移されたものであると考えられる。なおイノシシは下顎骨の割合が低い。28号集石は前期に帰属し，少量のシカの骨片があった。また配石墓跡から焼けたイノシシやシカの骨も出土しており，焼かれた人骨や焼かれていない人骨に伴っているものもある。

岩手県北上市八天遺跡では，縄文時代後期のG-26土坑から焼けた人骨とイノシシの下顎骨が出土している。人骨は成人2個体（うち老年が1個体），10歳未満の子供が1個体の計3体であり，部位が偏って細片として664.5g出土した。確認された個体数よりも大幅に人骨の量が少ない。焼けた成人2体の骨が829.7g出土したH53土坑と比較しても明らかである。これに対し火葬という観点から八天遺跡の両土坑例を検討した花輪宏は「他所に埋葬されていた遺体が焼かれた後に運び込まれた」結果であるとしている（花輪2003）。つまり死者を埋葬して完全に骨化もしくはある程度骨化させて，それを掘り出し別の場所で焼いた後にこれらの土坑に埋めたということであり，その過程で完全に骨が回収できなかったため出土した骨が個体数

に比べて極端に量が減ってしまったと解釈している。その場合，G26 土坑例は，人骨を焼くと同時にイノシシの下顎骨も焼いてこの土坑に埋めたと考えられる。

長野県伊那市百駄刈遺跡では，住居とその付近から焼けた動物骨が出土した。2 例あり，いずれも縄文時代後期のものである。1 号住居は床全体が焼けており，炉と住居の半分から焼けた骨片が出土している。骨の詳細は不明であるが炉から出土しているものは動物骨であると考えられる。焼けた床の上に炭化材が堆積し，柱穴と考えられる地点から炭化物が出土していることから，この住居は火災にあった可能性がある。3 号住居は炉とされる石の付近の焼土中から少量の骨粉が出ている。また 1 号住居の付近に特殊遺構と称された遺構がある。

山梨県北杜市金生遺跡では，住居と石組から焼けた動物骨が出土し，また 1 号配石の石棺状石組みから焼けた人骨も出土している。特徴的な遺構は 29 号住居に隣接した 8 号土坑と，30 号住居である。8 号土坑には焼けたイノシシの下顎骨 138 個体分が埋まっており，当歳のイノシシが 8 割を占めている。成獣の下顎骨もあり，こちらは全て犬歯が抜かれた状態であった。土坑の底面に焼土がみられることから土坑内で焼いたと考えられる。上層では黒土と焼土が混じっており，一度に土坑内で骨を焼いたのではなく別の場所で焼いて土坑に運んだ可能性もある。この土坑への動物の埋納に当たって，動物種やその部位，年齢が強く意識されていたことが分かる。29 号住居の内外から土偶や土製耳飾り，石剣といった祭具とも考えられる遺物が出土しており，この住居も含めて祭祀施設で存在した可能性がある。30 号住居は 2 軒の住居が重なっており，A 住居は縄文時代晩期中葉から後葉で B 住居は晩期前半のものである。A 住居の床面を掘り進んだ際に焼けた鹿角片と距骨 1 点が散乱して発見されたと報告されており，B 住居に伴うものとしている。そして B 住居の床面 10cm 上に焼けた鹿角片が 549.8g と大量に出土した。出土状況から B 住居の廃棄後に散布されたものであり，焼土がみられないことから別の場所で焼いたものであると考えられる。

山梨県都留市中谷遺跡では，住居 2 軒と配石遺構 1 基から焼けた動物骨が出土している。住居は掘り込みを持つ柄鏡形敷石住居であり，円形の居住部に石が敷かれた入口部が付設されている。入口から見て奥壁付近から，2-6cm の焼かれた鹿角 41 点が出土している。焼土がみられないため別の場所で焼いて移したものであると考えられる。12 号住居も同様の柄鏡形敷石住居であり，住居内から状況不明の焼けた動物骨片が 600 点以上出土している。またこの住居は石棒の出土状況が特徴的であり，3 本の石棒が炉石を中心として等間隔に配列されていた。これに加えて敷石が丁寧であることから，報告書において 12 号住居は祭祀場の可能性があるとされた（山梨県埋蔵文化センター 1996）。4 号配石は主軸ラインが 9m，そこに直行するラインが 11m の環状配石である。2 × 3m に平石が並べられた中心部には深さ 30cm の掘り込みがみられ，そこから炭化物と焼けた獣骨 300 点が出土した。

福島県大熊町道平遺跡は住居 1 軒と埋設土器 37 基とで構成される遺跡であり，一部の土器の中および周辺から動物の焼骨が出土している。SI-22，SI-23 グリッドを中心に埋設土器が 15 基集中し，11 号土器内から若いイノシシ 2 点とシカの成獣の骨が 1 点検出された。1 号，2 号

土器付近からはシカの骨，18 号，21 号土器付近からはイノシシの骨が焼かれた状態で出土した。また 8 号土器付近からイノシシを模した土製品も出土しており，報告書における大竹憲治の論考によると集中した 15 基の埋設土器は狩猟を祈願する祭祀に関する遺構ではないかとしている（大竹 1983）。なお土器内と付近には焼土がみられないため，焼骨は別の場所で焼かれ移されたものと考えられる。

群馬県桐生市千網谷戸遺跡は 1 号住居内から焼かれた動物骨が細片で出土している。動物はイノシシとシカが中心であるが，他にツキノワグマや幼いサル，キジも確認された。イノシシとシカの骨に関しては部位に偏りがみられ，特に頭骨が少ない。1 号住居は上層の A と下層の B に分かれており，出土したイノシシの年齢については，上層で成獣，亜成獣，幼獣の数がほぼ等しいが，下層からは幼獣のみであった。B 住居は壁際から柱と考えられる炭化物が出土しており，火災住居の可能性がある。また同住居には特殊遺構とされているものがある。それは，大型石皿が伏せられ，その脇に石棒を加工したとされる石刀があり，付近に赤色顔料を塗付された小円礫が 5 つ配置されるという特異な例を示す。この B 住居については，動物骨の出土状況や特殊遺構から何らかの儀礼的な行為が行われていた可能性がある。

新潟県糸魚川市寺地遺跡では配石遺構が検出されており，うちひとつから焼けた動物骨が出土している。炉状配石とされ，幅 2m の円形内に幅 1m の配石を伴った円形の炉がある。炉内の北端ピットから焼けた獣骨と焼けた人骨が細片，もしくは骨粉状で灰や木炭片と共に出土している。人骨は計 3kg 以上，成人 11 体以上であり，すべて抜歯が施されていた。上層からは有茎石鏃，底面からは朱塗土器が文様を下にして 4 点出土している。イノシシやシカが多いものの動物は多種にわたり，キツネ，サル，魚類ではサメやカワハギが同定された。炉内には厚さ 4cm の焼土層があり，炉石の際までは焼土層は認められないが骨はここで焼かれた可能性が高い。本遺構は人骨が出土していることから墓であると考えられ，炉内から土器片や石器と共に焼けた硬玉原石が出土し，副葬品であった可能性がある。個体数の多さから別の場所に埋葬したそれぞれの人骨を，本遺構に移して獣骨と共に焼いた結果が想定される。焼かれた動物が多種にわたることも特徴のひとつである。

3. 埋納遺構

動物骨の埋納遺跡のうち，本稿で触れるのは第 3 表の通りである。千葉県市原市草刈貝塚は住居のうち 2 軒から動物骨が発見された。135 号住居には熟年の女性が仰臥屈葬されており，住居の覆土中からイノシシの犬歯を欠いた片側の下顎骨が損傷なしで出土した。141 号住居では床面の上層に焼土層があり，そこからイノシシの上部が欠損したイノシシの上顎骨がほぼ完形で出土した。出土層から住居の廃棄後に骨を置いたと推測される。周辺から土器片や黒曜石の破片数点，カキやマテガイなどが集中して発見されており，この住居と関連する可能性がある。この遺構について田井知二は，焼土層が複数回にわたり堆積したものとし，またその量から廃棄後もある程度遺構に対する儀礼が継続されていたとした（田井 1983）。

第3表　埋納遺構の検出された遺跡例

	遺跡	時代	出土した動物	人骨との関連	出土状況（場所）
1	千葉県船橋市 取掛西貝塚	早期	鹿・猪		配列
2	北海道釧路市 東釧路遺跡	前期	イルカ		配列
3	千葉県市原市 草刈貝塚	前期～中期	猪・鹿	○	住居
4	茨城県つくば市 小山台貝塚	中期	猪		配列
5	福島県いわき市 大畑貝塚	中期～晩期	猪・クジラ・アワビ	○	20 × 20m 内散乱
6	宮城県松島町 西の浜貝塚	後期	猪		配列
7	千葉県市原市 西広貝塚	後期後半～晩期	猪	○	住居
8	福島県いわき市 薄磯貝塚	晩期	鹿		石囲い遺構
		後期末～晩期初	鹿・貝類・亀・魚類		鹿角集中遺構
		不明	鯛・猪・鹿		焼礫群
		晩期	鹿	○	1号土坑墓

福島県いわき市大畑貝塚では「アワビ祭祀場」とされる遺構から動物骨が出土している。この遺構では20㎡の範囲に完形土器が15点，巨大な石棒が頭部のみ1点，アワビの殻が72点，クジラの椎骨が1点，大型イノシシの上顎骨と下顎骨がそれぞれ2点，シカの下顎骨が2点出土している。名称にあるようにアワビの殻が大量に出土した遺構である。報告書において男性的な要因と女性的な要因が混在した祭祀的な機能を持った遺構としている（いわき市教育委員会 1975）。

同じ福島県いわき市の薄磯貝塚では，シカを中心とする動物骨が出土した特徴的な遺構が認められる。いわゆる鹿角集中遺構からは，土器片46点，石器10点，鹿角製斧を含む骨角器30点，貝，亀，魚の動物遺存体31点が出土している。また焼けた礫もみられる。石囲い遺構からは注口土器を中心に土器片，鹿角，骨製釣針，シカの下顎骨が出土した。焼礫群は50 × 50cmの範囲で鹿角製斧やその他の動物遺存体があり，1号土坑墓からは人骨，礫と共にシカの下顎骨が出土した。

宮城県松島町西の浜貝塚では，G2トレンチから動物骨の配列遺構が出土した。トレンチの貝層下から，南北1m，東西2mにわたって配列されたイノシシの下顎骨25体分が出土しており，全ての下顎骨は東を向き歯の部分を下方に向けていた。この遺構の検出面からは，他の動物骨や遺物は確認されていない。

茨城県つくば市小山台遺跡では，イノシシの下顎骨が2点並列に東向きで配列された遺構が検出された。いずれも若い雄の個体で犬歯が抜かれている。千葉県市原市西広貝塚57号住居からは，中央にイノシシの上顎骨が配置され，人骨や赤色顔料が付いた貝11点と磨石1点が出土している。人骨については，集積人骨が1例と埋設した土器から幼児の骨がタカラガイの加工品と共に出土した例などが認められる。

北海道釧路市東釧路貝塚からは，イルカの頭骨の配列が2例報告されている（沢 1987）。ひとつは5体のイルカの頭骨を，口ばしを中心に向けて放射状に配列した遺構である。もうひとつはイルカの頭骨を並列で板状に積み重ねた遺構である。これらの遺構の近くから火を焚いた跡やベンガラの散布が見られたことから，イルカ猟に関する儀礼がおこなわれたのではないか

とされている。

近年発見された例として，2009年に調査された千葉県船橋市取掛西貝塚におけるSI-002竪穴住居跡を挙げることができる。そこではイノシシの頭蓋骨12体分とシカの頭部2体分が集中して出土した（石坂2009a, b）。報告書が出版されていないため詳細は不明であるが，イノシシの一部には被熱しているものがあり，シカの後頭部には人為的に打ち欠いた跡があるとされている。この遺構は縄文時代早期の例であり，動物骨が特異に扱われた最古の例の一つである。

Ⅲ．考察

以上動物骨が特異に扱われた例を紹介してきた。本稿で扱ったこうした例について，動物骨と遺構の出土状況に基づき分類したのが第4表である。埋葬された動物はイヌとイノシシがほとんどであり，有吉北貝塚を除いてすべて人骨と関連がある事例である。イヌの埋葬例は縄文時代に広く確認されており，その時期も限定的ではない。そうした扱いから人とイヌの関係性が他の動物に比べて近いものであったと推定できる。また近年，内山幸子が人とイヌの関係をまとめており，一般的な見解である猟犬としてのイヌだけではない関係性を人とイヌは築いていたとした（内山2014）。白井大宮台貝塚と前浜貝塚のイヌの埋葬例は猟犬としての役割だけとは言い切れないイヌと被葬者との近い関係性を示した例と言えるだろう。骨折治癒痕のあるイヌの埋葬例も同様である。イノシシの埋葬例もすべて人骨に関連しているが，個人に伴うものというよりは集団に伴っていると考えられる。下太田貝塚や田柄貝塚では人の墓域にイノシシが埋葬されており，下太田貝塚の幼獣埋葬区域や首のないイノシシの埋葬をみると，何らかの強い意図をもってイノシシの埋葬行為を行ったと推測できる。肉や骨の獲得という実利的な目的を超えて動物埋葬という行為を行っているので，それが何らかの儀礼行為であったことは容易に想像されるが，どのような儀礼を目的としていたのかを推定することは容易ではない。例えば葬送儀礼が行われたと推定するにはそれを体系的に跡づけるための様々な行為の跡を見出す必要があるだろう。今のところイヌを除いた動物単体の埋葬は有吉北貝塚の例しかなく，出土状況から明確な動物の埋葬例であるとは断定できない。つまり直接動物を対象とした葬送はイヌ以外に確認できないと言える。埋葬例についてまとめると第1表が示すように動物の埋葬は人の埋葬と多く関連している。イヌの埋葬は個人の埋葬に関連することから，人とイヌとの近い関係性を示していると言える。イノシシの埋葬は墓域において多く行われ，埋葬の中には強い意図をもって行われているものがあることから人間集団の葬送儀礼に関連していた可能性がある。つまり動物種において埋葬の目的に差異があり，イヌは人との関係の近しさに起因してイヌ自体を対象として人とともに埋葬され，イノシシの一部は，個人というよりも人間集団の埋葬に関わる儀礼的な行為の結果によって埋葬されたと推定される。

焼骨として出土する動物骨はイノシシとシカが主であり，出土場所は様々であるが住居から出土したものが多い。それは両者が生活において多く利用された動物であることを暗示している。そのうち金生遺跡の30号住居の例は住居の廃棄もしくは建設時に際して焼骨を散布した

第4表　本稿で扱った遺跡例の分類（下線は他の項目と重複していることを示す）

出土状況による遺構の分類

I　埋葬状態

① 人の墓域、その付近で出土

→ 白井大宮台貝塚（中期 千葉）下太田貝塚（中 - 後期 千葉）田柄貝塚（後期 宮城）
西広貝塚（中 - 後期 千葉）　小山台貝塚（後 - 晩期 茨城）前浜貝塚（晩期 宮城）
伊川津貝塚（後 - 晩期　愛知）

② 動物単体で出土

→ 有吉北貝塚（中期 千葉）

II　焼骨の状態

① 住居に伴って出土

→ 円光房遺跡（中 - 晩期 長野）百駄刈遺跡（後期 長野）　中谷遺跡（後 - 晩期 山梨）
金生遺跡（晩期 山梨）　千網谷戸遺跡（晩期 群馬）

② 動物骨のみで出土

→ 金生遺跡（晩期 山梨）中谷遺跡（後 - 晩期 山梨）
道平遺跡（後 - 晩期 福島）

③ 人骨を伴って出土

→ 八天遺跡（後期 岩手）円光房遺跡（中 - 晩期 長野）寺地遺跡（晩期 新潟）

III　埋納状態

① 配列されて出土

→ 小山台貝塚（後 - 晩期 茨城）西の浜貝塚（後期 宮城）
東釧路貝塚（北海道　早期一前期）

② 動物骨と遺物が集積して出土

→ 大畑貝塚（中 - 晩期 福島）　薄磯貝塚（後期 - 晩期 福島）

③ 住居に伴って頭骨が出土

→ 草刈貝塚（前 - 中期 千葉）　西広貝塚（中 - 後期 千葉）

と推定される。他の遺跡においても住居から焼骨が出土している例が多いことから，イノシシやシカの焼骨は，住居に関する儀礼行為の結果であると想定し得る。しかしこれを検証していくためには，焼失住居を含めた遺構のさらなる検討が必要だろう。また金生遺跡には動物の特定の部位を年齢の選別を伴って複数回焼いた遺構も存在する。動物骨を中心として特異に出土した遺跡は他にも中谷遺跡と道平遺跡などがあるが，出土している動物種から生業に関わる儀礼の可能性が高いと思われる。動物骨を中心とした遺構の他に，八天遺跡や円光房遺跡，寺地遺跡のように人の再葬の一環として動物骨が焼かれたと想定される遺構も検出されている。再葬の目的としては祖先崇拝の現れ（山田 1995）や生前の社会関係の再確認（設楽 2007）などが想定されている。再葬行為の目的にも集団や地域によって差異があると考えられるが，再葬を行う際に動物骨を共に焼く習慣が存在した可能性があると言えよう。

埋納された動物骨に関しては，その出土が最も多いのはイノシシであり，部位は頭骨が多い。イノシシに次いで多いのはシカであるが，他の例と比べて若干多いだけであって埋納される動物はイノシシが中心であったと言える。出土状況の一端を第 3 表にみることができるが，動物埋葬や動物焼骨と比較すると，その儀礼の背景にある目的を推定することはより困難である。埋納動物骨のうち，明確に配列された遺構に関しては動物種から判断すると狩猟や漁撈に関する儀礼が執り行われた可能性があるが，事例や解釈についてのさらなる検討が必要である。大畑貝塚や薄磯貝塚は様々な要素が混在しているために複合祭祀の結果である可能性がある。住居から動物の頭骨が出土した遺構については，住居から焼骨から出土した遺構と同様に，住居に関わる祭祀というカテゴリーで再検討できる余地はあるかもしれない。しかしいずれの状況も慎重な検証が必要になってこよう。

動物骨を特異に扱った遺構を出土状況によって整理分類することで，動物骨を用いた儀礼の目的を推定できる可能性について言及してきた。動物の埋葬遺構はそのほとんどが人の埋葬と関連していた。しかしイヌとイノシシの埋葬ではその目的が異なり，前者はイヌ自身あるいはそれと関係の深い人物の葬送に関連して，後者は個人というよりも人間集団の葬送儀礼と関係していた可能性が高いと考えた。また動物の焼骨の一部は住居に関連して出土しており，住居の廃棄に関係した儀礼に用いられていた可能性があり，焼けた動物骨のみの遺構は動物種の特徴から生業に関わる儀礼の結果であると考えられる。人骨と共に焼かれた動物骨は再葬を含む人間の長い葬送儀礼の一環として焼かれた可能性がある。動物埋納については，生業に関する儀礼，複合祭祀場，住居に関する頭骨の儀礼などに用いられたことが想定された。しかし遺構の出土状況によって儀礼を推定することには限界がある。縄文時代の動物を用いた儀礼行為を考えるうえで，広く儀礼活動についての民族誌データを集積するとともに，民族考古学の成果を反映させることによって解釈を発展させることが今後の課題として挙げられる。また近年の調査報告を含めた検討遺構例の増加とともに，遺構に基づいた体系的で詳細な儀礼の復元を試みていく必要があるだろう。

謝辞

本稿は卒業論文に加筆，修正を施したものである。常木晃先生をはじめ，先生方や先輩方に多くのご指導とご教示を賜りました。深く感謝申し上げます。

註

1）主題について儀礼がその目的や行われた際に動物が何らかの形で関わっていたものをその対象とする広義なものである。つまりその儀礼が形式や目的において動物を主としているもの，人間やその他の動物以外のものを主としているものの双方を含んだ名称である。

2）全6つの分類である。ABCの3類と大別し，A類は貝塚から出土するタイプ，B類は貝塚付近から出土するタイプ，C類は内陸から出土するタイプとした。さらに遺構の特徴からA類はⅠ・Ⅱ・Ⅲ型，C類はⅠ・Ⅱ型に分けられている。

3）分類は以下の通りである。

Ⅰ 住居から出土しているもの。　Ⅱ 環礫方形配石遺構から出土しているもの。

Ⅲ 配石遺構から出土しているもの。　Ⅳ 土坑から出土しているもの。

Ⅴ 土器から出土しているもの。　Ⅵ 包含層から出土しているもの。

イノシシとシカが動物種の中心であり，前者は下顎骨，後者は角が多く両者に共通するのは肩甲骨であるとした。

参考文献

伊川津貝塚編集委員会　1972　『伊川津貝塚』.

石坂雅樹　2009a　「千葉県取掛西貝塚」『考古学ジャーナル』585号33-36頁.

石坂雅樹　2009b　「縄文時代早期前半の貝塚調査―千葉県船橋市取掛西貝塚」『季刊考古学 109』89-90, 85-86頁.

市原市文化財センター　2005　『市原市西広貝塚，2』.

いわき市教育文化事業団編　1988　『薄磯貝塚：縄文時代晩期貝塚の調査　本文編』.

いわき市教育文化事業団編　1988　『薄磯貝塚：縄文時代晩期貝塚の調査　図版編』.

内山幸子　2006　「オホーツク文化動物儀礼」『北海道考古学 42』75-92頁.

内山幸子　2014　『イヌの考古学』同成社.

馬目順一編　1975　『大畑貝塚調査報告：いわき市泉町下川字大畑所在』.

大竹憲治　1983　「縄文時代における動物祭祀遺構に関する二つの様相―東北地方南部の資料を中心として―」『道平（どうだいら）遺跡の研究：福島県道平における縄文時代後・晩期埋設土器群の調査，[1]』260-273頁.

桐生市教育委員会　1980　『千網谷戸遺跡発掘調査報告』.

設楽博己　2007　「縄文―弥生移行期の葬制変化（東日本）」小杉康ほか編　『死と弔い：葬制』同成社 192-207頁.

沢　四郎　1987　「東釧路貝塚とその生活」『釧路叢書 第24巻』120-153頁.

菅谷通保・樋泉岳二　1998　「茂原市下太田貝塚の集団墓と動物の埋葬―ヒト・イヌ・イノシシ類の埋葬」『動物考古学』11号69-74頁.

鈴木保彦　2006　「環礫方形配石遺跡遺構」『縄文時代集落の研究』雄山閣 129-149頁.

総南文化財センター　2003　『下太田貝塚：かんがい排水事業（排水対策特別型）新治地区埋蔵文化財調査業務，本文編』.

総南文化財センター　2003　『下太田貝塚：かんがい排水事業（排水対策特別型）新治地区埋蔵文化財調査業務，分析編』.

高山　純　1976・1977　「配石遺構に伴出する焼けた骨類の有する意義」『史学 47-4・48-1』.

千葉県文化財センター　1990　『市原市草刈貝塚』.

千葉県文化財センター　1992　『小見川町白井大宮台貝塚確認調査報告書，平成 3 年度』.

千葉県文化財センター　1998　『千葉市有吉北貝塚，1：第 1 分冊（本文），2 分冊（分析・付図・付表），3 分冊（写真図版）』.

戸倉町教育委員会　1990　『円光房遺跡：長野県埴科郡戸倉町更級地区県営ほ場整備事業に伴う幅田遺跡群円光房遺跡緊急発掘調査報告書』.

新津　健　1985　「縄文時代後晩期における焼けた獣骨について」.

八幡一郎先生頌寿記念考古学論集編集委員会編　『日本史の黎明』六興出版 125-153 頁.

新津　健　2011　『猪の文化史 - 考古編』雄山閣.

丹羽百合子　1983　「解体・分配・調理」加藤晋平［ほか］編『縄文文化の研究 2』103-121 頁.

寺村光晴［他］編　1987　『史跡寺地遺跡：新潟県西頸城郡青海町寺地遺跡発掘調査報告書』.

長野県教育委員会　1973　「14 百駄刈遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報書 昭和 47 年度［1］（伊那市西春近）』76-86 頁.

西本豊弘　1983　「縄文時代の動物と儀礼」『歴史公論』94 号 52-56 頁.

西本豊弘　1996　「縄文時代の狩猟と儀礼」『季刊考古学』55 号 33-37 頁.

西本豊弘　2008　「動物観の変遷－ 1 縄文の動物観－」.

西本豊弘編　『人と動物の日本史 1』吉川弘文館 61-69 頁.

花輪　宏　2003　「縄文時代の「火葬」について」『考古学雑誌 87-4』253-283 頁.

春成秀爾　1995　「熊祭りの起源」『国立歴史民俗博物館研究報告 60』57-99 頁.

東釧路市教育委員会　1962　『東釧路』.

北上市教育委員会　1979　『八天遺跡，本文編・図版編』.

丸子　亘・永松　実・斎藤　隆編　1976　『小山台貝塚』.

宮城県教育委員会　1986　『宮城県文化財調査報告書 第 111 集（田柄貝塚）』.

宮城県本吉町教育委員会　1979　『前浜貝塚』.

山田康弘　1995　「多数合葬例の意義―縄文時代の関東地方を中心に―」『考古学研究』42 巻 2 号 52-67 頁.

山梨県教育委員会　1988　『金生遺跡：県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書，1』.

山梨県教育委員会　1989　『金生遺跡：県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書，1』.

山梨県埋蔵文化財センター　1996　『中谷遺跡』.

渡辺一雄　1983　『道平（どうだいら）遺跡の研究：福島県道平における縄文時代後・晩期埋設土器群の調査，［1］』.

渡辺一雄　1983　『道平（どうだいら）遺跡の研究：福島県道平における縄文時代後・晩期埋設土器群の調査，別冊』.

牧　武尊

Rituals of Using Animal Bones in the Jomon Period

MAKI, Takeru

Some faunal remains were utilized in an unusual way during the Jomon period of Japan. They can be classified into three types: animals that were interred; animal bones that were burnt and lastly animal bones that were buried. In cases of interment animals themselves were buried or interred near human burials. Burnt faunal remains were associated with houses, in a burnt context by themselves or associated with human remains. Within a burial context some faunal remains were placed deliberately, animal bones and tools were buried together and in some instances human skulls were found in dwellings.

Differences are reflected in the interment of animals. Dogs were often found near particular burials. This might be a result of the close-relationship between a person and the dog. The interment of wild boars was al most always found in cemeteries and could be related to funeral rituals. Burnt bones present in dwellings might be the result of rituals concerning the abandonment of houses. The characteristics of other burnt faunal remains indicate they might be associated with rituals related to livelihoods (e.g. hunting or fishing). In addition evidence suggests animal bones were burnt with human remains in reburial ceremonies. It is suggested that burial of faunal material was associated with rituals related to livelihoods, places of complex rituals, and ritual treatment of animal skulls in the house.

In future research, it is necessary to ascertain where faunal bones were modified in unusual ways at other sites and determine why this occurred by referring to ethnographic rituals and ethnographic archaeology.